

アイヌ文化と北海道

本田 優子

1. はじめにー私の活動の原点

札幌大学の本田と申します。本日は「アイヌ文化と北海道」という題でお話をさせていただきます。

最初に簡単に自己紹介をさせていただきます。私は石川県金沢市の出身で、北海道大学に進学し、大学卒業後に平取町の二風谷に移り住みました。ここで萱野茂先生（一九二六～二〇〇六年）の助手を務め、一一年間生活しました。萱野先生はアイヌ民族としては初の国会議員（参議院議員、任期一九九四～九八年）にもなり、現在も日本で最も有名なアイヌの方ではないかと思っています。二風谷は平取町内にある、人口四〇〇人ほどの小さな地区です。住民の七～八割がアイヌの血を引いていると言われています。私にとって、二風谷での一一年間の生活が、研究者というよりは、人間としての軸足をつくってくれたと考えています。私が二風谷時代に行っていたことは、一つは、

一九八三年に萱野先生が設立した私塾「二風谷アイヌ語塾」の講師です。この塾は、アイヌのコミュニケーションで、アイヌのおじさんが、アイヌの子どもたちに、アイヌ語を教えるという日本で初めての画期的な試みで、幸いなことに私はそのスタートから関わることができました。

もう一つはアイヌ語辞典の編纂で、これに助手として携わっていました。この辞典は『萱野茂のアイヌ語辞典』のタイトルで、初版が一九九六年に三省堂から刊行されています。個人名がタイトルに含まれる不思議な辞典ですが、それは萱野茂という一人のアイヌが知っているアイヌ語を一冊にまとめたものであることを意味しています。例えば、萱野先生の隣りに住むおばあちゃんから私が聞いたあるアイヌ語は、先生自身はご存知なかったため、収録されていません。この辞典は、刊行当時はアイヌ語への世間の関心は今ほど高くなかったのですが、とても売れたと聞いています。アイヌ語を積極的に勉強する気持ちがなくても、例文を読むだけでもアイヌの世界観が何となくイ

メージできると評判になりました。

このようにアイヌ語に関わる仕事にも携わっていましたが、私自身は一住民として生活していました。私がこの地に移り住むきっかけは、大学院への進学前、萱野先生に手紙を出したことにあります。手紙には、先生のお宅に居候をさせていただきます。ながら、現代のアイヌについて教えてほしいと書き、これを受け入れていただきました。

移住した当時は、アイヌ語塾が始まったばかりの頃ですが、その年の夏前に萱野先生が病気になる、苦小牧の病院に入院してしまいました。私は、せっかくながら始まった大事な塾を潰すわけにはいかないと思いましたが、私自身は大学でアイヌ史を研究していたとはいえ、全くアイヌ語はわかりませんでした。そこで、萱野先生が入院されている苦小牧の病院にノートを持って通い、先生に教えられたことをそのまま子どもたちに教えるようになりました。そのうちにすっかりそれが楽しくなり、大学の研究室にこもって研究するよりも、二風谷で子どもたちと一緒にアイヌ語を勉強する方が自

分の性には合っていると思うようになりました。それで、先生が退院した秋頃には、二風谷に永住し、アイヌ語の復興運動のお手伝いをすると決め、あわせて、研究のための一時的な移住という当初のスタンスを捨て、二風谷の一住民になると決めました。

現在は大学の教員になり、研究者としての道を歩んでいます。実は私は二風谷での一一年間に、自分のための研究資料を何一つつくっていませんでした。他の研究者などからは、「あの時代の二風谷に一一年も暮らして、自分の資料が一つも無いのか」と呆れられることもありましたが、さほど後悔はしていません。あの当時、アイヌのおじいちゃんやおばあちゃんに会う度にマイクを突きつけてテープに録音するようなことをしていたら、今のような人間関係は築けなかったと思うからです。

私には息子が二人います。私がある日、夕飯の支度をしていると、当時中三の長男と中一の次男の会話が聞こえてきました。長男が「俺たちにはほんのちよつとでもものを考える力があるとすれば、それは小さいときに二風谷に住んでいたおかげだよな」と言い、これに次男が答えて「うん、そうだな。俺が兄ちゃんよりちよつとだけ頭が悪いのは、二風谷にいたのが二年少なかったからだな」と言いました。この会話を聞いて私は大笑いしたのですが、次の瞬間に涙が出てきました。なぜなら、二風谷時代の私は、息子たちよりも、アイヌ

語塾の子どものたちのことを意識するように心掛けて日々の生活を送っていたので、それでも二風谷の人たちが私に代わっていろいろなことを息子たちに教えてくれたのだと実感でき、嬉しくなったからです。今も息子たちは、知的好奇心が旺盛で、「俺たちの全てのエネルギーは二風谷にある」と言います。二風谷の人たちには大きな恩義を感じています。

2. アイヌの世界観を学んだ二風谷時代

私は二風谷で暮らした一一年間に、本当に様々な経験をさせてもらいました。私自身がアイヌの世界観の一端を体験した、いくつかのエピソードをご紹介します。

最初は水の神様のお話です。私が暮らしていた頃は、まだ二風谷から程近い場所でも川遊びができたのですが、当時、萱野先生もよく私の息子と一緒に川遊びに行ってくれていました。ある時、息子がオシッコをしようと川の傍に立ってズボンを下ろそうとしたとき、先生に「そこでするな！山行つてしろ！」と怒鳴られました。先生はまず子どもを怒鳴るような人ではなかったので、怒鳴られた息子は驚いて山の方に走っていき、またズボンを下げようとしたら、「山の方を向いてしなさい」と言われました。なぜかと言えば、川にはワッカウシカムイという水の神様がいらつしやるので、オシッコのような汚いものをそのまま川に

流すというのは、アイヌ社会では絶対にタブーからです。

これは二風谷に限らず、全道のアイヌ社会に広く見られる習俗です。更科源蔵のフィールドノートを見ると、オホーツク地方のアイヌが海に漁に出た際、尿意を催したときなどは、わざわざ船を陸に揚げたということが記録されています。

また、洗濯の作法にも水の神様への配慮が見て取れます。アイヌは川の水に洗濯物を直につけて洗ったり、汚れた水をそのまま川に流したりはしません。川から水を汲んできて、洗濯は陸上で行い、汚れた水は土の中に流し、また新たに川から水を汲んでくる、というかたちで行っていたそうです。この話を萱野先生から聞いたとき、「土にも土の神様はいますよね。それは良いんですか」と尋ねたところ、先生は「良いんだ。土の神様は汚いものを綺麗なものに換えて、水の神様のところまで運んでいくという役割を持っている」とおっしゃいました。自然界で微生物が果たす役割など、現代の自然科学の知見とも合致する考え方です。

アイヌの社会では、神々はそれぞれの役割を持つており、それを侵してはいけないという世界観が生活の隅々に行き渡っています。一九八〇、九〇年代はこのような世界観の中で生きているお年寄りがまだたくさんいらつしやつたのです。

続いてはトイレの神様に関するお話です。ある日、私が仲良くしていたおばあちゃんの家に長居

したとき、トイレを借りました。トイレの室内にはくず籠が置いてあり、その中に鼻をかんだティッシュが捨ててありました。確かに、ティッシュをそのまま水洗トイレに流すと詰まるので流せませんが、そのおばあちゃんの家のトイレは汲み取り式でしたので、ティッシュを落としても問題ありません。それでもわざわざ手間をかけて分別するのは、トイレの神様は人間の排泄物を受け取るのが役割であり、鼻をかんだティッシュのよくな汚いものを落として受け取らせるわけにはいかないという考え方があるからです。

次は床の神様に関するものです。私の次男は幼少期、自宅でも他所の家でも、飲食物をよく床にこぼしてしまふ子でした。他所の家でジュースをこぼしたときなどは、私はいつも大慌てで謝るのですが、そうすると必ずおばあちゃんたちは、「怒るんでない。いま床の神様が飲みたかつたんだから」と言ってくれて、こぼした次男は自分が悪いわけではないと思うことで気持ちが悪くなります。これは神様をいわば出汁に使いながら人間関係を上手く切り結んでいく知恵であり、それを学ばせてもらったということですね。

最後はストーブの神様に関するお話です。私の長男は小さい頃は本当にせわしない子だったので、あるとき、萱野先生宅の茶の間を走り回り、幸い火はついていなかったのですが、ストーブに激しくぶつかつたことがあります。長男が泣こうとしたその瞬間、先生は「泣くんではない。今は

ストーブの神様も痛いんだから、撫でてあげなさい」と言いました。そう言われた長男は、べそをかきながら、ストーブを撫でていました。ここには、ぶつかつたときに痛いのは自分だけではなく、相手も痛いんだから、ぶつかつた瞬間に痛みを他者と共有する、という考え方が見て取れます。素晴らしい教育だと思えます。

二風谷での一年間、アイヌの世界観の中で生活をしているうちに、私は、アイヌの世界観こそ未来を切り拓くと確信するようになりました。国連のSDGs「持続可能な開発目標」は、所詮は資本主義社会における企業の生き残り戦略の到達点だと思えますが、こうした地球環境の問題などについても、アイヌ文化を学ぶことを通じてよく理解できると思います。学生にはいつも、アイヌ文化は古いものではなく、アイヌ文化こそ最先端と言っています。

3. アイヌ民族の歴史と現状を正しく理解するために

以上で紹介してきたとおり、アイヌ社会には素敵なコミュニティがあります。にもかかわらず、日本のマジョリティである和人は、なぜアイヌ民族を差別的な目で見てきたのか。また、どうしてアイヌ文化の価値を理解できないまま今日まで至ってしまったのか。このようなことを考えながら、私はこれまで生きてきました。

私の場合、日常生活の中で現代のアイヌの姿を学んだということが私自身の向き合い方を決定しましたし、その意味で、日本社会に流布してしまっているアイヌの間違ったイメージを正すのが自分の役割だと思っています。そうした立場から、誤解している人が特に多いと思う以下の三点についてお話しします。

(1) いつから北海道に住んでいるのか

博物館の展示などで、一三世紀からアイヌ文化期が始まったという記述を目にします。こうしたこともあり、アイヌの人たちは一二〜一三世紀頃に北海道に現れた、という認識が広まっていると感じます。

しかし、これは実際には大きな間違いです。確かに一三世紀頃からアイヌ文化期が始まったとされますが、ここでいうアイヌ文化は、茅葺きの家への居住、宗教的な儀式やアイヌ文様の発達など、現代の視点でアイヌ文化として認識されている事柄を指しており、ヒトとしてのアイヌが現れたことを意味しません。

ヒトとしてのアイヌは、かつてこの北海道という島に暮らしていた縄文人の子孫です。一説では、アイヌ民族のDNAの七割程度が縄文DNAだと言われています。オホーツク文化人との混血もDNA研究から判明していますが、ヒトとしては明らかにアイヌ民族は縄文人の子孫です。

これに関係して、アイヌ民族に関する著書を多数書いている瀬川拓郎氏（札幌大学教授）は、著書のまえがきに、北海道を指して、「一万年以上にわたり、同じ人間集団が住み続けているという、世界でも稀有な島」と書いていました。

(2) イメージと実態の乖離

アイヌ民族に対しては、「平和な北の島で、自然とともに、神々とともに、心豊かに生きてきた人たち」というイメージがあるように思いますが、それは間違いとは言いませんが、一面的です。

最近知られるようになってきたアイヌの歴史上の実態は、一つは「交易の民」であったということです。このことが知られるきっかけになったのは、中国のある歴史書に關係する記述が見つかったことです。ここには、一二六四年、クギ（アイヌ民族の先祖）とギレミ（ニブフ族の先祖）の交易上のトラブルに元が介入し、サハリンに侵攻して、アイヌと交戦したこと、さらに一二九七年には、アイヌが大陸に渡り、元と交戦したことが記録されています。つまり、いわゆる元寇のうち、一二七四年の「文永の役」に先立つこと一〇年前、元は北九州に襲来する前にサハリンに襲来し、アイヌと戦っていたということです。

こうした歴史的な事実を踏まえると、アイヌ民族は、北海道という島の中だけで平和に暮らしてきた神聖な民族ではなく、戦うべきときには戦う、

他の人間集団と変わらない歴史を辿ってきたと言えます。

江戸時代に、交易の民としてのアイヌが扱っていた交易品を一つ例に挙げるとすれば、ラッコの毛皮です。この頃、ラッコの毛皮は交易品として非常に価値が高いとされてきました。毛の密度の高さなどにより、断熱性、防寒性に非常に優れるという特徴があるからです。千島の極寒の海でもラッコが皮下脂肪のないスマートな身体で生きていけるのは、防寒性に優れた毛皮があるおかげです。当時、千島列島の得撫島の周辺は「ラッコ島」と呼ばれており、北千島アイヌがラッコを獲って、まず北海道アイヌに持っていき、これを北海道アイヌが松前藩に持っていき、そこから本州に流通していました。

一方、中国からは、アイヌの中継ぎ交易により、山丹服などが日本にもたらされました。山丹服は、元々は清朝の役人の制服でしたが、アイヌによってもたらされたことにより、本州社会では「蝦夷錦」と呼ばれました。例えば、アイヌの首長たちを描いた「夷酋列像」（一七九〇年）という絵画の中には、赤いロシア製のマントの下に蝦夷錦を着ている人物（イコトイ）の描写もあります。このほか、女性の宝物であるタマサイ（首飾り）に使われるガラス玉なども大陸由来のものと言われています。

また、本州との交易により、アイヌ社会に漆器類や小袖などの様々な和製品がもたらされました。

漆器類は、現在もアイヌのチセ（家）の中に多数飾られ、大事にされている様子がうかがえます。現代のアイヌの儀式も、漆器類がないと成立しません。アイヌの中継ぎ交易により、ロシアのアムール川流域に暮らす民族にも和製の漆器類が残されていることがわかっています。

小袖は、記録によれば、女性ではなく男性が、儀式の際の第一級の晴れ着として着ていたそうです。林子平が書いた『三国通覧図説』（一七八五年）には、アイヌの一つの家族が多種多様な衣服を着ている様子が描かれています。こうしたことから、アイヌ社会では、外来の衣服を採り入れる際、元の作法にはこだわらず、綺麗なものはどのようにしても採り入れるという衣服文化があったのではないかと考えられています。

(3) アイヌ民族はもういないのか

二〇一四年八月、一人の札幌市議が「アイヌ民族なんて、いまはもういないんですよね」とインターネット上に書き、大きな問題になりました。残念ながら、これはごく一部の偏った思考の持ち主に見られることではなく、同じような思考の人たちは一定の広がりをもって存在しているように思います。

こうした状況がなお見られるので、アイヌ民族の現状をあらためて以下にご紹介していきたいと思えます。

道内のアイヌの人口は、道庁の二〇一七年調査の結果によると一万三一一八人です。二〇〇六年調査は二万三七八二人でした。二〇一七年調査の結果が出たとき、一部の新聞などでは北海道のアイヌ人口は一万三〇〇〇人と報じられました。が、一年で一万人もの人口が一気に減るようなことはあり得ません。

私はこれまでこの調査結果を信じないでほしいと言いつつ続けてきました。この数字は、道内のアイヌ人口ではなく、自分がアイヌだと認めた人の数だからです。長い差別の歴史の中で、自分がアイヌだと言いたくない人もたくさんいるため、道庁の調査結果にはこうした人たちは含まれていません。また、自分がアイヌの血を引いているというルーツを知らないまま育ってきた人も増えているようです。私の授業を受けている学生にアンケートをとると、これまでで最も顕著な事例としては、三人に一人以上が「二〇〇〇人以下」というイメージを持っていました。けれども実際には道庁の調査結果をはるかに上回る数のアイヌが道内には暮らしています。

これに対し、アイヌ語を日常会話で使っている人はゼロです。現在、日常会話としてのアイヌ語は消えてしまっています。それはアイヌ語を使える人が一人もいないという意味ではありません。年配の方の中には、まだかろうじて自分の意思をアイヌ語で伝えられる人が何人かいらっしやいます。あるいは、外国語のような感覚でアイヌ語を

勉強し、会話で使えるようになった若者たちも育ってきています。しかし、一軒の家の中にアイヌ語を使える人が二人以上存在しないと、アイヌ語による会話は成立しないので、アイヌ語会話が成立している家は道内には現在一軒もないはず。二〇〇九年にユネスコ（国連教育科学文化機関）が報告した世界の消滅危機言語のリスト（“Atlas of the World's Languages in Danger”）の中で、アイヌ語は「極めて深刻」、すなわち、消滅の深刻度が最も高いものの一つとされています。

以上から、アイヌ民族が現在持たれている「ごく少数の人々が今なお伝統文化を守って生きている」というイメージは、二重の意味で誤解です。想像よりはるかに多数の人々がいながら、明治以降の同化政策の中で、言語も含めて自らの文化を失ってしまった、それを現在取り戻そうとしているというのが、より正確な現在のアイヌの姿です。

4. なぜアイヌ文化の伝承を目指すのか

私は二風谷で生活していた頃、以下の二つのことを願っていました。

第一は、アイヌの若者たちを大学に行かせてあげたい、ということ。アイヌの若者たちの進学率は、二〇〇六年の時点ではわずか一七・四%にとどまり（二〇一七年では三三・三%に上昇）、アイヌが居住する市町村（ほぼ道内全市町村）

の平均三八・五%の半分以下です。都道府県別の大学進学率では、北海道は沖縄県に次いで低い水準です。二〇歳前後の期間を大学で過ごせるということを私は非常に幸せなことだと思っていますが、私の周囲には、親に反対されて大学に進学できない若者が少なからずいたので、経済的な問題などを解決し、アイヌの若者の多くにもそのような機会を提供したいと考えていました。

第二に、アイヌの子どもたちに民族教育の場を提供したいと思っていました。言葉の背後には世界観や歴史が広がっています。アイヌ語には、小さな言葉がいくつか集まって全く異なる意味を形成するものがたくさんあります。例えば「ヤイコシラムスイエ」という言葉は、「自分に対して自分の心を揺らす」という意味ですが、これが「考える」という動詞になります。この言葉を知るまで、私は「考える」ことは脳の働きだと思っていましたが、知里真志保氏が編さんしたアイヌ語の辞典を通じて、アイヌの人たちは、「自分に対して自分の心をどういう振れ幅で、どのように揺らすか」―「考えること」だと思ったから、こういう言葉が生まれたのだと気づかされました。

仮に言語が、自らの意志の伝達手段にすぎないのであれば、アイヌの子どもたちも、日本語や英語の「考える」という言葉さえ知っていればいいのかもしれない。そうすると、「心を揺らす」という世界観は消えていきます。日本語の「考える」の語源の一つは「彼向かう（かむかう）」で

あり、いったん自分の外に出ることです。同じ「考える」を意味する言葉でも、アイヌ語と日本語ではベクトルが正反対です。どちらが良いとは言えません。だからこそ、世界観や歴史を受け継いでいくために、民族語は大事なのです。ところが、現代の日本社会では、アイヌの子どもたちがアイヌ語を勉強できる場所はほとんどなく、二風谷には萱野先生が立ち上げたアイヌ語塾が存続して大きな成果を挙げていますが、他の地域では、かつて存在していたアイヌ語教室は廃止されてしまっています。

歴史や物語についても同様です。日本の公教育しか受けていないアイヌの子どもたちは、自らの民族の歴史についてはほとんど何も知りません。また、古代文学者の金沢英之氏（北海道大学教授）は、アイヌの物語を読んで、「こんなに豊かな物語世界が展開しているのは、世界でも稀有」だと言っていました。にもかかわらず、アイヌの子どもたちの大部分は一つの物語も知りません。民族としての根っこ、人間としての根っこを持たないようになっていくということです。

一昔前はアイヌであることがわかると差別を受けますが、近年は「アイヌは格好良い」と言う人が増えてきています。それ自体は非常に良いことなのですが、そういう方々に限って、アイヌの子どもたちを見るときに、「あなたたちはアイヌなのだから、誇りを持って堂々と生きていきなさい」という視線を投げかけてきます。私は民族の

文化はシャワーのように降り注ぐものだと思っていますが、アイヌの子どもたちには雨の一滴も降ってきません。そのような中で、何を誇りに生きていけばいいのか。民族語を勉強する機会もなく、自らの歴史や物語を知らないアイヌの子どもたちには、誇りにするべきものが何一つの内にはありません。私が何よりも民族文化に関する教育を重視する理由がここにあります。

私たち和人が、当たり前のように日本語を話し、日本という国の歴史を多少とも知り、たぐさんの昔話に包まれて育ってきたということは、当たり前前のことだと思っているけれども、実は「多数者だけが持つ無自覚の特権」だと思います。アイヌの人たちにも、私たち和人が当たり前を持っていると思っているのと同じ権利があります。その権利とは、母語で育ち、民族の歴史を学び、民族の物語に包まれて生きていくという当たり前前の権利であり、アイヌの人々はこれを取り戻したいと願っているにすぎないと私は思っています。

北海道では、アイヌの問題と言えば差別の問題と理解されていることが今も大半を占めると思いますが。差別の問題はもちろん重要ですが、それを解消することはマイナスをゼロにすることにすぎません。アイヌの人たちは差別が無くなって皆一緒になることを望んでいるわけではなく、アイヌ独自の文化を獲得したいと思っています。そのための権利をどのように保障するかが重要です。この点を考えるようになって初めて、アイヌのこと

を考えると、私自身は大学でこれまでに関わってきたアイヌ文化伝承の試みについてご紹介させていただきます。二〇一〇年度から立ち上げた、「ウレシバ・プロジェクト」です。ウレシバは「育て合う」という意味のアイヌ語です。

5. アイヌ文化伝承の試み「ウレシバ・プロジェクト」

次に、私自身が大学でこれまでに関わってきたアイヌ文化伝承の試みについてご紹介させていただきます。二〇一〇年度から立ち上げた、「ウレシバ・プロジェクト」です。ウレシバは「育て合う」という意味のアイヌ語です。

プロジェクトは、「一般社団法人札幌大学ウレシバクラブ」を推進母体としています。ウレシバクラブにはすでにたくさんの方の個人や企業からご賛同をいただいています。二〇一九年六月現在の入会状況をご紹介しますと、個人会員は計二七三名で、このうち一般会員二〇五名、学生会員一八名、卒業生会員二〇名、教職員会員二一名、名誉会員九名となっています。カンパニー会員は五三社です。活動には以下の三つの柱があります。

(1) ウレシバ奨学生制度

第一の柱は「ウレシバ奨学生制度」です。アイヌの若者たちに入学金と授業料の相当額の奨学金を給付するものです。学費の心配はせず、大学に進学してもらう一方、この制度を利用して入学したからには、大学でしっかりとアイヌ文化を学んでもらい、次代を担うリーダーの育成を企図して

います。これにより、私が二風谷で願っていた、高等教育の機会の提供、民族教育の機会の提供の二つを実現できたように思っています。

奨学金制度によりすでにたくさんさんの成果があがっています。ここでは、一度社会人になってから、この制度を利用して大学に入ってきた、第一期生の女子学生についてご紹介します。

彼女はとても優秀で、小学生の頃に先生から大学への進学を勧められたことがあるそうです。その晩、嬉しくてそのことをすぐに母親に報告したところ、母親は困った顔をして「どうしてそんなことができるの？」と言われたそうです。彼女に後に聞いたところによれば、「小学生の時に自分の人生に大学という選択肢は無いと思定めた」と言っていました。その後も様々な苦勞をし、地元役場で嘱託職員として働いていたとき、ウレシバ・プロジェクトの立ち上げと奨学金制度の存在を新聞広告で知り、応募してきました。彼女は面接のとき、「私はアイヌだということです」と差別されてきたから、周りからはアイヌだ、アイヌだと言われても、自分からは口が裂けてもアイヌだと言わないと誓って生きてきました。でも、私はここでアイヌの文化を学んでアイヌとして生きていく」と、泣きながら言ってくれました。私自身、思い出す度に涙が出て来る、忘れられないエピソードです。彼女は本当に優秀で、四年間を通して、一番の成績を取り続けました。卒業式には、自分で縫った民族衣装を着て、卒業生総代と

して学長から卒業証書を受け取りました。二〇二〇年四月に白老に開館する国立アイヌ民族博物館の学芸員（研究職員）として働くことが決まっています。

また、彼女と同期で社会人入学してきた男子学生は、札幌大学の大学院の修士課程に進学し、修了後、ウレシバ・プロジェクト専門員として大学の職員になっています。ここで働きながら、北海道大学の博士課程にも通っています。

(2) ウレシバ・カンパニー制度

第二の柱は「ウレシバ・カンパニー制度」です。これはウレシバ・プロジェクトの下で学んでいるアイヌの若者たちを企業にサポートしてもらう制度です。

なぜこのような制度をつくったかと言えば、プロジェクト立ち上げの当時、アイヌだとわかると就職できないということが珍しくない時代だったからです。この理不尽な状況について知り合いの中小企業の社長に尋ねたところ、以下のようなことを言っていました。

「自分は差別意識はないから採用してもいいと思っている。でも、そんなことを社員全員に聞いたことはないから、仮にアイヌだとわかっている人を採用し、年配のまだ差別意識を持っている人が事件を起こしてしまったら、あの会社は民族的差別をするとなんでもない会社だと、社会的に致命的

なダメージを受ける。だから、トップというのはリスクの少ない方を選ぶ」と。

こうした考え方は企業経営者の立場からは一理あるかもしれませんが、そのように割り切られてしまうと、アイヌであることを前面に出しているウレシバ・プロジェクトの学生はいつまで経っても就職できないことになります。そうだとすれば、出口を保障する制度をつくっておかないと、早晚このプロジェクトは潰れてしまうと思います。そこで当時、私自身には企業とのパイプは一切ありませんでしたが、志の高い企業は必ずあると信じ、この制度を立ち上げました。

プロジェクトの理念に賛同して中心的に活動してくれる企業を「ウレシバ・カンパニー」とし、これに登録していただいた企業は、年会費五万円を納めてもらうとともに、優秀な学生が育った場合には優先雇用枠を検討することをお願いしています。ウレシバ・カンパニーは三四社に上っており、JR北海道や北洋銀行といった大企業にも登録していただいています。一部の企業との関係者の方には、プロジェクトの立ち上げを逆に感謝されたり、クラブ主催のイベントに積極的に参加したりしていただいています。

(3) ウレシバ・ムーブメント

第三の柱の「ウレシバ・ムーブメント」とは、プロジェクトの推進母体であるウレシバクラブを

母体として、アイヌの若者だけでなく、一般の在
学生、留学生など、いろいろな民族が一緒になっ
て、アイヌ文化を勉強する取り組みを指します。

大学の中でアイヌ民族の存在が日常化することで、
現代社会を共に生きる仲間としてのパートナー
シップを醸成し、多文化共生のコミュニティモデ
ルをつくることを目的としています。

この一環で、ウレシパクラブでは二〇一〇年か
ら年一回、活動状況の報告とアイヌ文化の発信を
目的に、「ウレシパ・フェスタ」というイベントを
開催しています。入場者数が最も多かったのは、
第四回（二〇一三年一月三日）で音楽家の坂本
龍一さんをゲストに招いたときです。二〇一七年
の第八回では人気漫画『ゴールデンカムイ』を、
二〇一八年の第九回では松浦武四郎を特集しまし
た。

二〇一九年の第一〇回では小説家の五木寛之さ
んをゲストにお招きする予定です。五木さんはか
つて、サンカという山の民をモデルとした『風の
王国』（一九八五年）という小説を書き、その後
『サンカの民と被差別の世界』（二〇〇五年）とい
う作品も書いています。この小説の中で語られる
理想的なコミュニティの姿が私の願っていたもの
ととても似ていて、大きな感銘を受けたことがあ
ります。第一〇回ではこのほか、私の方から、ウ
レシパ・プロジェクトのこれまでの一〇年を振り
返り、これからの一〇年を展望するお話をしたい
と考えています。

6. アイヌ語復興への希望と道筋

(1) 先住民族言語復興の先進地に学ぶ

アイヌ語の復興を目的とする活動の一環で、ハ
ワイ語の復興に学ぶ活動が続いています。ハワイ
諸島には元々はハワイ王国という独立した国が
あったのですが、一八九八年にアメリカ合衆国に
併合されてハワイ州となり、今日に至っています。

アメリカへの併合後、当然ながら、ハワイ語は
話者が激減し、先ほどご紹介したユネスコの消滅
危機言語リストでは、アイヌ語と同じ「極めて深
刻」に分類されています。しかし、ハワイ語はア
イヌ語とは状況が全く異なっています。

一つの転機は、一九八三年にハワイ大学でハ
ワイ語を学んだハワイアン你若者たちが、自分たち
の子どもは絶対にハワイ語だけで育てたいと決心
し、ハワイ語を日常語として使う幼稚園「プーナ
ナレオ (Punana Leo)」を設立したことです。
設立の当事者に話を聞くと、当時はまだ教育の場
でのハワイ語使用が禁止されており、検挙も辞さ
ない覚悟だったそうです。しかし、最も辛かった
のは検挙の恐怖ではなく、身内からの反対だった
そうです、おじいちゃん、おばあちゃんから、「こ
の英語しかない社会で、ハワイ語しか喋れない子
どもをつくってどうする」、「仕事に就けないぞ」、「
バカになるぞ」などと強く反対されたそうです。

それでも若者たちは挫折せず、幼稚園でハワイ語
だけで子どもたちを育て、さらに卒業後にハワイ
語教育をストップさせるわけにはいかないと、小
学校から大学まで一貫してハワイ語だけの教育
を実践するための環境整備に必死に取り組みまし
た。これをイマージョン教育といいます。今やハ
ワイにはたくさんさんのイマージョン校があります。

ハワイ大学のハワイ言語学科では、博士課程も
含め、講義中にはもちろん休み時間もハワイ語を
使っています。大学職員もハワイ語に堪能で、大
学の第一公式文書はハワイ語で書かれます。まず
ハワイ語で文書をつくり、アメリカ本土や学外と
やりとりをする必要が生じたときに英語に翻訳し
ます。唯一英語を使っている科目があります。英
語という科目です。その時だけ、スイッチを切り
替えるために帽子を被っています。

プーナナレオが設立された一九八三年は、萱野
先生が二風谷アイヌ語塾を創設した年です。実は
萱野先生は当初、私塾ではなく、アイヌ語教育を
行う保育園をつくらうとしていました。当時、二
風谷の季節保育所が常設保育所に切り替わる時期
で、新たな保育園が設置されたときには、萱野先
生自身が園長になって、そこで子どもたちに自ら
アイヌ語を教えたいと思っていたのです。しかし、
保育園は厚生省管轄の施設であり、言語教育の実
施が可能な文部省管轄の幼稚園とは別物なので、
保育園では言語教育をしてはいけないと国から言
われました。日本社会党の支援などもあり、一時

は条件付きでの設置許可が下りかけたのですが、萱野先生自身が条件付きでの設置を嫌がり、最終的に自宅の敷地内に子ども図書館を建て、そこで私塾をスタートさせたという経緯があります。同じ一九八三年にハワイと二風谷で同じような動きがあったのに、今やハワイ語とアイヌ語の間には大きな開きが出来てしまいました。

プーナナレオの設立から一〇年後に当たる一九九三年、私は初めてその視察に行きました。この年が国連の「国際先住民年」にも位置づけられていたことから、アメリカ合衆国政府から招待され、アメリカの先住民教育について自由に一カ月間調査する機会に恵まれました。その途中で、プーナナレオでのハワイ語教育の実践に関する情報が入り、特例でハワイに寄ってから帰国することが認められました。

プーナナレオに行ってみると、ちょうど園児たちは昼寝の時間だったので、しばらくすると起きたので、聞いたことがない言葉、すなわちハワイ語が周囲で聞こえ始めました。私は驚きながら、案内役の園長先生に「この子どもたちの中で、ご両親がハワイ語がわかる人はどのくらいいますか」と尋ねたところ、「一人もいない。親たちは全員、英語しか喋れない」との答えでした。にもかかわらず、寝ぼけまなこでもハワイ語しか喋らない子どもたちが一〇年後には育つていたということです。私は大きな衝撃を受けつつ、ここに希望を見出しました。

その後しばらく訪れる機会に恵まなかったのですが、二度目の訪問は二〇一七年に叶いました。二〇一六年になって突然、「プーナナレオを見てこなければ」と思い立ち、あわせて、私一人だけでなくウレシパクラブの学生たちと一緒に見に行きたいと思い、二〇一七年に学生たちを全員連れて視察にうかがいました。このとき、学生たちは園児たちと手をつないで一緒に遊びました。実はこれは特別なことなのです。ハワイは世界の先住民言語復興のトップランナーで、今や世界中から視察者が訪れていますが、通例は遠くから眺めるだけだそうです。私たちは「アイヌ語を取り戻す人々たちだから」と、特別にこうしたことを許してくれたようです。

こうしたハワイの動きは、実はニュージーランドから始まったものです。プーナナレオ設立の前年に、ニュージーランドでマオリの人たちが先行して同様の幼稚園を設立していました。これが先住民のグローバルネットワークを通じてハワイに伝わり、プーナナレオの実践につながっています。二〇一八年には学生たちを連れてニュージーランドのマオリ語教育の視察研修にも行きました。ハワイやニュージーランドで学生たちが必ず言われてきたのが、「絶対に諦めないでください。あなたたちがやらないで、誰がやるのですか」ということです。

もう一つ、二〇一七年のハワイ視察で聞いた、プーナナレオの園長先生の印象的な言葉があります。

「言葉は一代で消えることもあります。一代で取り戻すこともできるのです」。これは彼女の体験だそうです。彼女もご両親は英語しかできなかったのですが、自分は絶対に自分の子どもをハワイ語で育てたいと、ハワイ大学に進学してハワイ語を勉強し、プーナナレオの園長になり、自分の子どもはもちろん、たくさんの子どもたちをハワイ語で育てています。

このハワイ視察の終わりに、一緒に行った女子学生の一人は、彼女は二風谷出身でしたが、「アイヌ語を取り戻すことは不可能だと思っていました。でも、考えたこともなかった。でも、ひよつとしたら、頑張ればやれるかもしれない」と言ってくれて、非常に嬉しく思いました。ただし、状況はかなり違います。ハワイでは宣教師が早くから文字をもたらしたので、ハワイ語の新聞や日常会話の記録などが多く残っていますが、アイヌ語はそういう資料がほとんどなく、日常会話を復活させるのはハワイ語に比べてもさらに困難です。それでも、「絶対に不可能」と考えていたのが「ひよつとしたら可能かも」と思えるようになっていったというのは大きな前進だと思います。

(2) 北海道でアイヌ語を公用語化する可能性と意味

私は現在、アイヌ語を北海道で公用語化するこの可能性について、いろいろな場面で話してい

ますが、残念ながら、本気で聞いてくれる人は現状ではほとんどいません。

それでも、あえてこのようなことを言うことには理由があります。例えばニュージールランドには公用語が三つあり、それは英語とマオリ語と手話です。とはいえ、ニュージールランドの人たち全員が手話をしながら話しているわけではありません。公用語とは、我々の暮らすこの土地はそのことをリスベクトしている人間が住んでいる土地なのだという、そういう宣言なのではないかと思つています。

日本の公用語は何かご存知ですか。実は日本には公用語は存在しません。インターネット上で先日見た言葉を使わせてもらおうと、「一つの言語があまりにも支配的な国では、公用語という概念すら存在しない」のです。だとすれば尚更、このような状況はアイヌ語にとってはチャンスかもしれません。日本全土は難しいとしても、北海道に限って、条例で北海道の公用語をアイヌ語と定めてしまふならば、北海道はアイヌ語をリスベクトしているという宣言になるのではないかと思つています。

7. 文化復興の気運と課題

(1) アイヌ文化振興法の制定経緯と今後の課題

日本国内で制定されたアイヌ民族に関わる法律

としては、まず一八九九年制定の「北海道旧土人保護法」があります。保護といいつつ、目的はアイヌ民族を日本人に同化させることにあり、差別も含め様々な問題を後世に残していく原因の一つになりました。

この法律が廃止されたのは、制定から一〇〇年近く経った一九九七年、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」、いわゆる「アイヌ文化振興法」が制定されたことによります。しかし、法律名のとおり、文化振興に偏向しているという点に批判が集まりました。

アイヌ民族をめぐる状況が大きく変わり始めるのは、二〇〇七年に国連が「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を採択してからです。これを受けて一九九八年、日本国内でも政府がアイヌ民族を先住民族と初めて認めることとなり、今日に至る流れをつくりました。一九九八年の内閣官房への「アイヌ総合政策室」の設置、二〇〇九年の「アイヌ政策推進会議」の発足などを経て、二〇一九年五月二四日、「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」、いわゆる「アイヌ施策推進法」が施行されました。同年七月には内閣に官房長官をトップとする「アイヌ政策推進本部」も設置されています。内閣への設置は恒久的なものであることを意味し、臨時的な対応である内閣官房への設置とは重みが違います。

アイヌ施策推進法は、アイヌ民族を初めて法律上で「先住民族」と明記した法律です。民族差別を禁止することを明記するとともに、サケの捕獲や樹木伐採などの伝統継承のための特例措置や新型交付金などについても定めています。第七条第一項に基づき、基本方針も策定されます。「アイヌ施策の総合的かつ効果的な推進を図るための基本的な方針」、二〇一九年九月六日閣議決定。

新型交付金は、アイヌの人々の要望を実現することを目的に、市町村が企画し申請するもので、アイヌ文化振興に資する事業であるならば、アイヌが居住していない市町村でも申請が可能です。二〇一九年度は一〇億円が予算化されています。自治体負担は二割ですが、翌年度に一分が返ってきます。新型交付金の創設には良い部分もありますが、問題を引き起こしていく可能性を懸念しています。

このほか、同法は二〇二〇年四月下旬に白老町に開設予定の「民族共生象徴空間」、愛称「ウポポイ」の設置根拠になっています。東京以北では初の国立博物館である「国立アイヌ民族博物館」をメインに、国立民族共生公園、慰霊施設などで構成される施設です。完成予定図を見ると、敷地内は芝生が多く、「アイヌ文化は森の文化」と解している私にとっては納得しがたい外観です。推進本部のトップも務める菅官房長官は、この分野への思いが強いそうで、同年夏開催予定の東京オリンピック・パラリンピックの開会式前に「世界

に誇れる博物館をつくる」と宣言したほか、年間
の集客目標を当初の五〇万人から一〇〇万人につ
り上げました。集客が瞬間的なものになって後が
続かなかつたり、下からの積み上げによる文化復
興の取り組みを破壊されたりしては困るので、こ
の点はしつかりとチェックしていきたいと思っ
ています。

(2) 「北海道価値」としてのアイヌ文化の可能性

現状を見る限り、アイヌ文化の持つ価値につ
いては、一部の企業がいち早く気づき始めているよ
うに思います。

例えば、ウレシパ・カンパニーにも登録してい
ただいているソメスサドル社は、砂川市に本拠を
持つ革製品の会社ですが、二〇〇八年洞爺湖サ
ミットで各国首脳へのプレゼントをつくったと
き、大変悩んだ上で、最終的に辿り着いたのは、
内側に漆でアイヌ文様が描かれたバッグでした。
また、鶴雅グループの大西雅之社長は、アイヌ政
策推進会議の委員も務め、「アイヌ文化で北海道
を変える」ために積極的な発信をしています。
ところが、行政側の動きは義務感が漂い、鈍重
です。この原因は恐らく、長らくアイヌ民族を福
祉の対象としてきたため、その文化が価値や富を
生み出す可能性がある」と認識できないのではな
いかと分析しています。

それは世界の先住民族の認識とは全く異なりま
す。例えば、マオリの人々を見ると、マオリビジ
ネスは巨大化し、グローバルネットワークが広
がっています。今やニュージーランドの政府も、
マオリは社会を豊かにしてくれる存在として歓迎
し、マオリ人口が急激に増加しています。これに
対し日本では、アイヌ人口を減らそうとしている
政府の意図がうかがえます。世界の先進的な先住
民族政策に追いつこうとするならば、やはり相当
の税金を投入せざるを得なくなるからです。日本
でも政府がアイヌ民族への認識を変えていく必要
があります。

北海道民、日本国民の多くがアイヌ文化の価値
を理解し、リスペクトするようになるとともに、
アイヌ民族自身が自らの文化の価値を理解し、自
覚を持つてダイナミックに動き出せば、日本社会
の姿は大きく変わると思います。

二〇一八年にニュージーランドへ視察に行つた
とき、マオリ発展省の前大臣という方が対応して
くれました。その振る舞いが萱野先生を思い出さ
せる格好良い方でした。彼が学生たちにニヤリと
笑いながら言ったのは、「国になんか頼るなよ。
国なんか何もしてくれない。自分たちでビジネス
を起こし、富を蓄え、学校も建てて、未来へつな
げ」ということでした。ウレシパ・プロジェクト
では今後、ウポポイのような施設で働く人材を育
成しつつも、積極的にビジネスにチャレンジしてい
くようなアイヌの若者たちも育成していきたい

と考えています。

△ほんだ ゆうこ・札幌大学教授▽

本稿は、二〇一九年八月三日に開催した、
北海道史研究プロジェクト・第二回学習会の
内容をまとめたものです。 文責・編集部